

2. 定置網・まき網・船びき網で漁獲される魚介類

マイワシ *Sardinops melanostictus*



体の側面に7個前後の黒い斑点があり、他のいわし類と容易に区別できます。高知県内では、幼魚を銀虫（ぎんむし）、カエリ、小平（こべら）と、中・大型魚を平子（ひらご）、中羽（ちゅうば）、大羽（おおば）などと呼びます。特に、平子という呼び名が一般的です。なお、カタクチイワシのことをマイワシと呼ぶ地域もありますので、注意が必要です。鮮魚として広く利用されるほか、養殖魚の餌としても利用されます。仔魚は冬春季にシラスとしても漁獲されます。

生物特性

高知県で漁獲されるマイワシは太平洋系群に属します。1歳で被鱗体長17cm、2歳で19cmに成長します。寿命は7歳程度と考えられます。近年は1歳で約半分が成熟し、産卵しています。産卵期は10月から翌年5月で、その盛期は2月～3月です。近年の産卵場は土佐湾が中心となっています。なお、大規模な資源変動（後述）にともない、成長や成熟年齢、産卵場が変化することが知られています。

かつて資源が高水準であった時代には、マイワシの産卵場は紀伊半島沖から薩南にかけての黒潮流域に広く形成されていました。ところが、資源の減少に伴い産卵場が縮小し、低水準期となった1990年代の産卵場は、土佐湾を中心としたごく限られた海域となりました。その後、2010年から資源は回復基調となり、近年の産卵場は関東の東まで拡大しつつあります。

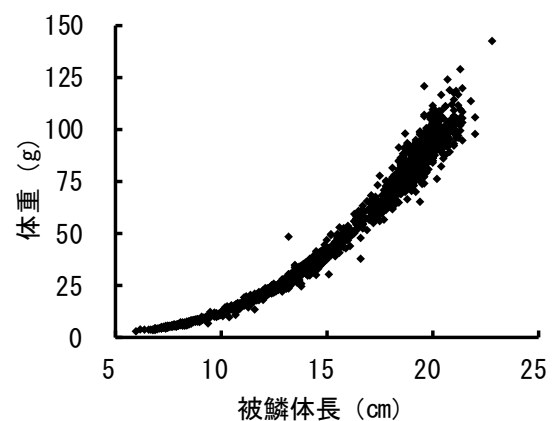


図1 高知県産マイワシの被鱗体長と体重の関係（平成23～27年の測定データに基づく）。

資源動向

マイワシは数十年の規模で大きな資源変動をする魚として有名です。最近では、1980年代（昭和55年～平成元年）を中心とした資源の増大期があり、この間の太平洋の資源量は、1,400万から1,900万トンで安定していました。しかし、その後資源量は急減し、1990年代後半（平成7年～平成11年）は数十万トン台で推移しました。その後もさらに減少が進み、平成14年（2002年）から平成19年（2007年）までは10万トン前後で推移しました。平成20年（2008年）以降は増加傾向となり、平成27年（2015年）の資源量は186万トンと推定されています。平成28年度の資源評価では、マイワシ太平洋系群の資源水準は「中位」、動向は「増加」とされています。

県内の漁獲動向

マイワシの大規模な資源変動を反映し、高知県内の漁獲量にも大きな変動がみられます（図2）。1980年代に漁獲量は増加し、昭和59年（1984年）には23,667トンのピークを迎えました。しかし、1990年代に急減し、平成5年（1993年）には5,000トンを下回りました。その後は概ね5,000トン以下で推移しています。平成19年（2007年）には漁獲量が8,850トンに達しましたが、これは宿毛湾で小型の成魚が一時的に多獲されたことによるもので、翌年からは再び低水準の水揚量となりました。

マイワシは、主に宿毛湾の中型まき網と、各地の定置網で漁獲されます（図3）。宿毛湾の中型まき網では、10月～翌年2月までが主な漁期です。また、7月にまとまって漁獲されることもあります。定置網では、冬～初夏にかけて漁獲されます。両漁法とも、夏は水揚量が少ない傾向があります。

冬から春にかけて、土佐湾内のシラス漁でマイワシのシラスが漁獲されます（シラスの項を参照）。その後、春から初夏にかけて、7cm程度の0歳魚が定置網に入るようになり、秋以降にはさらに成長した0歳魚がまき網や定置網で漁獲されるようになります。年が明けると、これに加えてより高齢の産卵親魚（19cm以上）も漁獲されます。これらをふまえ、高知県水産試験場では春から初夏の0歳魚の出現状況や、近県の漁況等から、漁況の予測を行っています。

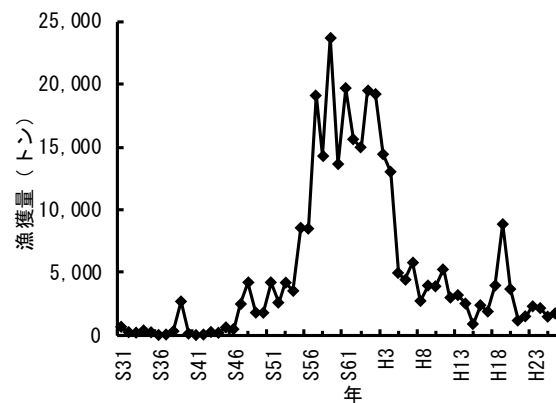


図2 高知県におけるマイワシ漁獲量の推移。

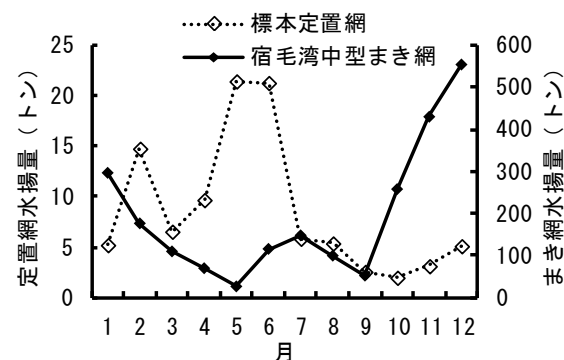


図3 標本定置網と宿毛湾の中型まき網によるマイワシの月別水揚量。平成18～27年の平均値で示す。